

第4回複合差別と闘うネパールの女性たち

パナソニック提供龍谷講座 in 大阪
～今、あなたに知ってほしい世界の現実～
2010年度 社会貢献・国際協力入門講座

日時 5月19日(水)午後7時～8時30分
会場 龍谷大学大阪梅田キャンパス研修室
講師 山本 愛 財団法人とよなか国際交流協会

(URL:<http://www.tcct.zaq.ne.jp/toyonakakokuryu/index2.html>)



講師の山本愛さんは、大阪府豊中市で地域の外国人支援の活動とともに、「サマンタ(反差別草の根交流の会)」を通じて、日本の部落解放運動とネパールの被差別カーストであるダリットの開放との連帯行動に取り組んでいます。

ネパール社会の状況

インドのヒンドゥー教の影響を受けており、家父長制やカースト制度といった差別的な身分制度がいまだに人々の意識に深く根付いています。60以上の言語があり、多様な文化や移住地域を持つ多民族国家です。それらの多様性とともに、様々な文化的・社会的対立が存在しています。例えば、大都市と遠隔地では経済的にも情報量の多さ等にも非常に大きな格差が生じています。

ネパールのカースト制度

ネパールのカースト制度は4階層に区分されています。

1. パン(ブラーマン) (司祭)	高	〔 1. 2合わせて人口比率約29% ダリットは約13% 〕
2. チェトリ(クシャトリア)(軍人)	↑	
3. ヴァイシャ(商人)	↓	
4. シュードラ・不可触民・ダリット	低	

ダリット(DALIT)とは

DALIT とはインドの不可触民開放運動から生まれた言葉で「抑圧されたもの」「壊されたもの」を意味します。他にも被差別カースト、不可触民とも呼ばれ、「不浄」な存在として扱われています。門地(生まれ)・職業に基づく差別で、国家統一の手段として政治的に設置されました。ダリットの人々が話す言語は約3種類あり、バックグラウンドも様々です。また、ダリットの中でも階級が分かれており、ダリット自体が団結していないため、一枚岩では解決できない複雑な問題となっています。

ダリットに対する差別の現状

- ・過去に土地を持つことが禁じられていた結果、土地を持たず貧困
- ・不可触制にもとづく差別：飲食店・寺院・井戸・公共の場への立ち入り禁止、共食の禁止(不可触制：ダリットが食物や水に手を触れるとその食べ物汚れていると考えられており、高位カーストは口にすることができない)
- ・強制労働(低賃金、または住居だけ与えられて賃金が与えられない)
- ・賃金差別、労働交換制度の名残(現金で賃金が支払われず、一年に一回米やサリーが与えられる お金がないので病院や学校に行くために地主に借金 半奴隷のように働かされる、という悪循環)
- ・結婚差別(異カースト間の結婚はタブーとされている)

複合差別の中のダリット女性

ダリットの女性は、家父長制における性差別の対象とされ男性から抑圧を受けています。また、伝統的なカー

スト社会の中で、最下位のダリットとして差別されています。加えて、貧困状態に陥っています。こういった複合した要因からなる差別は、いずれも優先順位をつけることができない深刻な問題です。

ダリット女性が抱える課題

現地 NGO フェミニスト・ダリット協会が調べたものをリストアップします。

- ・不可触制（特にダリット女性への穢れ意識は大きい）
- ・女性に対する暴力（家庭内暴力、性的搾取、高いカーストからのレイプ、人身売買）
- ・健康問題（栄養失調、子宮脱、HIV / AIDS）
- ・貧困（土地なし、失業、農業労働、不平等な賃金）
- ・異カースト間結婚（9割が離婚）
- ・教育機会からの排除（8割が非識字者）
- ・人権侵害（法制度と実施の問題）
- ・紛争（1996～2006）の影響（レイプ、行方不明、殺害、性的搾取、寡婦）

差別撤廃に向けた取り組み：フェミニスト・ダリット協会（FEDO）

FEDO とは 1994 年、ダリットの女性自身により設立された現地 NGO です。「ダリット女性の生存、正義、開発と参加を実現する権利と機会がある公正・平等な社会を築く」ために、1万人のダリット女性が権利の実現を訴えています。法改正を求めるキャンペーン、識字運動、政治参加などの活動をしています。（FEDO から国会議員が 5 人出ています）その結果、45,000 人以上のダリットが活動の恩恵を受けています。

開発・国際協力における人権の視点の重要性

開発を個々人のレベルでの充足を重視して考えたとき、ジェンダー^{*1} や人権の視点は必要不可欠な要因です。実は、援助が格差を生んでしまう場合もあります。支援の枠組みができる、そこからもれてしまう人たちもいるからです。支援に取り組むとき、その支援を受けることができないマイノリティ（＝少数派の人々）がいることを想像する力が必要です。そのためには支援をする人自身が、その社会の力関係をまず知らなければなりません。社会におけるマイノリティの権利を保障すると同時に、マジョリティ（＝大多数の人々）に根付いた差別意識などの変革も行っていかなければなりません。また、当事者の主体性を尊重することが大事な視点で、現地にある当事者の運動体と連帯し支援していくことが必要となります。

問題解決に向けて～解決に向けたひとつの事例：「サマンタ（反差別の草の根交流の会）」の活動

「サマンタ」は、日本の部落解放運動にかかわる人々とネパールのダリットとの交流を通じて、公正な社会作りを目指しているグループです。地域の当事者が他地域を訪れ、自他の抱える問題を比較し、解決へのアイデアを得、自分たちの経験を振り返り共に行動を促しています。大切にしていることは、コミュニティの人々自身が他地域の当事者の経験に学ぶことによって、自ら問題を発見・解決し、自らの手で、社会を変えることができるということです。

『ネパールの複合差別を知ることで、日本での複合差別とは何かと、足元の課題に目を向けていただくきっかけになれば』。山本講師はそのように語って講義を締めくくりました。

<注釈>*1

ジェンダーとは、性差を示す概念です。一般的にはセックス＝生物的性差、ジェンダー＝文化的・社会的性差というように簡単に説明されています。最近では、単に性別/性差を示す言葉として使われている場合もあります（本来ならセックスあるいは男女別を使うべきような場合に）。

また、厳密には「ジェンダーとは、男/女らしさについての通念、男/女とはこういうものという通念であり、社会を階層的に区別する上で一番もっともらしく使われる区別」であり、「タテの階層性をもつ（つまり、男が標準、主であり、女が特殊、従）」とされています。（大沢真理、「男女共同参画ビジョン」の特徴を意義、女性と労働 21、Vol5, No.18 より）